九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『ヘンリー四世』とオールドカスル／フォールスタフ論争

太田, 一昭
九州大学言語文化部

https://doi.org/10.15017/5420

出版情報：言語文化論究. 8, pp.61-76, 1997-03-01. 九州大学言語文化部
バージョン：
権利関係：

『ヘンリー四世』とオールドカスル/フォールスタフ論争*

太　田　一　昭

サー・ジョン・フォールスタフ(Sir John Falstaff)といえばもちろん，シェイクスピア(Shakespeare)の創造した有名な劇中人物，太鼓腹の騎士の名前である。この騎士は，1597年頃に初演されたと推定される『ヘンリー四世・第1部』(*1 Henry IV*)で初めて登場した。[1] フォールスタフは，デビューするとすぐに評判になった。現代の私たちにとってそうであるように，エリザベス朝の人びとにとってこの放埒の大酒飲み，大法螺吹きの臆病者は，実に愉快な喜劇的人物であった。しかし当時の人びとにとって，フォールスタフは，単純に愉快なキャラクターでは決してなかった。彼はまた，物議をかもしたのである。

周知のように，サー・ジョンの姓は最初，フォールスタフではなくオールドカスル(Oldcastle)であった。シェイクスピアは後に，オールドカスルをフォールスタフに変更した。これについてはテクストに変更を暗示する痕跡がいくつかあり，[2] また『第2部』のエピローグからも，まず間違いない。通説によれば，改名に至る経緯はこうである。[3] オールドカスルは，エリザベス朝宮廷の有力者コバム(Cobham)卿サー・ウィリアム・ブルック(Sir William Brooke)の祖先であった。コバム卿サー・ウィリアム・ブルックあるいはその子サー・ヘンリー・ブルック(Sir Henry Brooke)は，敬愛する祖先が歪曲されて描かれていることに不快を覚え，抗議をくり返した。作者はその強い異議申し立てに屈し，名前を変更した。この説に確実な根拠があるわけではないが，ブルック家からの圧力による改名を示唆する史料も残っており，[4] 現在最も有力な説のひとつである。しかし，たとえオールドカスル/フォールスタフの描き方がコバム卿の不興を買ったとしても，このスキャンダルは決してコバム卿だけに係わるのではなかった。オールドカスル/フォールスタフに関するいくつもの言説は，シェイクスピアの創造したこの人物が当時の最も大きな政治・社会問題のひとつに鋭く「介入」したことを示している。その問題とは，宗教改革以来継続していた英国の宗教対立・闘争である。本稿のねらいは，『ヘンリー四世』が，この対立・闘争にいかに深く係わっていたかを再検証することにある。

I

サー・ジョン・オールドカスルがイングランドの初期宗教改革者ジョン・ウィクリフ(John Wyclif)の教説を信奉するロラード派の人物であったことは，よく知られている。またオールドカスル/フォールスタフの戯画的描写が，オールドカスルを殉教者として尊崇する新教徒(特にウィクリフやロラード派の改革精神を継承し，徹底的なプロテスタント改革を推進しようとした清教徒[5])の反発を招いたことも周知の事実である。これについては同時代の証言がいくつも残っている。例えばマイケル・ドレイトン(Michael Drayton)他による合作の『サー・ジョン・オールドカスル・第1部』(*Sir John Oldcastle, Part 1*)。この劇は，『へ

ンリー四世・第1部』初演2，3年後の1599年10月あるいは11月頃に海軍大臣一座によってローズ座で上演されたと推定される。翌1600年には，その四折り本が出版されている。この劇がシェイクスピアの『ヘンリー四世』に対する新教徒側からの反論として執筆・上演されたのは，疑いをいれない。劇はその序詞において，作中描かれるオールドカスルは若者を堕落させる大食漢の老騎士ではなく，並ぶ者なき勇敢で有徳の殉教者であるとたからかにうたう。他方策略をめぐらすロチェスター(Rochester)司教は，否定的に描かれている。劇は，まぎれもなく反カトリック的である。ある批評家によれば，この劇は王権に対するエリザベス朝清教徒の忠誠宣言だという。[6]『オールドカスル』四折り本出版の翌年には，ジョン・ウィーヴァー(John Weever)による『殉教者の鑑』(*The Mirror of Martyrs*)が刊行されている。これもまた，『オールドカスル』と同じく，反カトリック的な視点から執筆されており，オールドカスルを「非常に勇敢で敬虔な殉教者」として称えている。ウィーヴァーは，清教徒的傾向の強い詩人であり，彼もまたシェイクスピア劇によって貶められたオールドカスルを徳高き殉教者として復活させようと試みたのである。[7]

シェイクスピアは，オールドカスル/フォールスタフを臆病な老騎士として描いたが，歴史上のオールドカスルは，シェイクスピアのサー・ジョンとは異なり，(新教徒の主張するように)勇敢で屈強な軍人であった。[8] 彼はフランスやウェールズでヘンリー四世麾下の武将として戦ったことがあり，ロダード主義のために問題を起こす前はヘンリー五世の覚えめでたき家臣であったらしい。オールドカスルがどのような経緯でロラード派に加わったのかは，よく分かっていない。彼は1413年9月に逮捕・投獄されたが，10月に脱獄に成功した。翌1414年にロラード派の反乱計画に係わり，お尋ね者の身となった。1417年12月に逮捕され，絞首された後，焼かれた。[9]

オールドカスルは優れた武人であった，と年代記執筆者は記述している。しかしその宗教的・道徳的な評価については，毀誉褒貶が同居している。[10] トマス・ウォルシンガム(Thomas Walsingham)やトマス・ネッター(Thomas Netter)といった15世紀のカトリック側の年代記執筆者は，当然のことながら，彼をきびしく糾弾している。彼らは，オールドカスルが放縦な生活を送り，国王に反逆した異端者であったと強調した。16世紀に入っても，例えばサー・トマス・モア(Sir Thomas More)は，異端を攻撃する文章のなかでオールドカスルの焚刑に触れ，オールドカスルはそのような過酷な処罰を受けてしかるべき異端者であったと主張している。またメアリー(Mary)女王の治世にカンタベリーの助際長であったニコラス・ハープスフィールド(Nicholas Harpsfield)は，オールドカスルが似非殉教者であり，国王に対する反乱を率いた反逆者であると断じた。ジョン・ストー(Jon Stow)は，1592年発行の『英国年代記』(*Annals of England*)増補版のなかでオールドカスルに触れている。ストーは，オールドカスルが勇敢な武人であることは認めながらも，「彼はきわめて邪悪な，国家と教会の敵であった」と記した。このようなオールドカスルについての否定的な記述は，これもまた当然のことながら，(後のシェイクスピア劇の場合と同じく)新教徒の反発を招いた。彼らは，尊敬すべき殉教者オールドカスルを謗る年代記執筆者をきびしく批判しつつ，他方でオールドカスル擁護の論を展開した。例えばジョン・ベール(John Bale)は，1544年出版の『簡潔なるサー・ジョン・オールドカスル伝』(*A Brief Chronicle concerning . . . Sir John Oldcastle*)においてオールドカスルの殉教を称え，彼が「命の続くかぎり神の名を称えながら焚殺された」と書いた。ジョン・フォックスは(John Foxe)は，『殉教者列伝』(*Acts and Monuments*)

初版(1563)において，オールドカスルの反逆者の汚名を濯ごうとした。彼にしてみれば，オールドカスルに関する否定的な歴史記述は，悪意に満ちた中傷，明らかな虚偽，おぞましい悪口にほかならなかった。フォックスは，1570年に『殉教者列伝』第2版を出版した際30ページからなる「オールドカスルの弁護」を加筆しているが，そのなかでオールドカスルを誹謗する歴史家たちの「不正確な」叙述をきびしく批判した。

このように相対立する評価を受けていたオールドカスルをシェイクスピアは，その武勇は無視し，追い剝ぎをする滑稽で臆病な騎士として描き，新教徒の，そしてことによるとコバム卿の，怒りを招いたのである。[11] この点に関連して，例えば「シェイクスピアはオールドカスルという名前を材源の『ヘンリー五世の名高い勝利』(*The Famous Victories of Henry the Fifth*)から借用したとき，彼のサー・ジョンと殉教者オールドカスルとを結びつけようという底意はなかっただろうと思われる」[12] という見解がある。あるいは「シェイクスピアは，後にどのようになるかあまり考えずに材源からオールドカスルの名前をとるというへまをやらかした」[13] といった見方がある。これらのコメントは，シェイクスピアがブルック家の風刺を意図していなかったという文脈でなされたものである。作者が風刺を意図していたかいなかったか—今はこの問題に立ち入らない。[14] しかし，たとえコバム卿を揶揄することがシェイクスピアの目的ではなかったとしても，彼が後のことをあまり考えることなく材源からオールドカスルの名前をとってきたとはいえない。私は，シェイクスピア自身に多少の計算違いがあった可能性を否定しない。つまりオールドカスル/フォールスタフが惹起したスキャンダルは，作者の予想より大きかったかもしれない。劇がコバム卿を怒らせたとして，作者はその怒りの大きさまでは予測していなかったかもしれない。しかしシェイクスピアは，オールドカスルを舞台上に再現することがどういう意味をもつかを十分に知っていたと思う。彼を滑稽に描くことが宗教的にどのような意味をもつかを。この時代，宗教は政治であり，政治は宗教であった。当時のイングランド，そしてもちろんヨーロッパ大陸諸国も，宗教改革と反宗教改革の争闘の時代，すなわちカトリックとプロテスタントがはげしく対立する激動期にあったということを，私たちは忘れるべきではない。この事実の歴史的意義は(これに関する論考がいくつも出ているにもかかわらず)十分に理解されていないと思う。十分に理解されていないからこそ，上掲のような見解が提出されるのである。私は，シェイクスピアは何らかの「底意」があって，初期宗教改革者を面白おかしく描いたのだと思う。その「底意」を同定するのは困難だが，劇上演の歴史的文脈のなかにそのヒントがありはしないだろうか。

II

16世紀ヨーロッパを激烈な宗教対立の渦に投ずることになった宗教改革の運動は，1517年のルターの「95箇条の論題」で一挙に始まったのではもちろんない。ローマ教会に対する改革の試みは，すでに14世紀から教会の内外で起こっている。15世紀の初頭にはピサとコンスタンツの宗教会議で教会改革が論議されている。これに先立ち，14世紀イングランドには前記ジョン・ウィクリフのような改革者が登場していた。彼の教説を信奉する者をロラードの徒と称した。ボヘミアではプラハ大学教授フス(John Huss)がウィクリフの影響を受けて教会改革を唱えた。15世紀末にはフィレンツェにサヴォナローラ(Girolamo Savonarola)が現れ，ほんの数年ではあったが神政政治を行った。[15]

シェイクスピアの歴史劇第2四部作劈頭を飾る『リチャード二世』(*Richard II*)の舞台

がウィクリフが現れた初期宗教改革の時代であることは，注目に値する。『ヘンリー四世』には，さまざまな時事的言及があるが，[16] リチャード二世～ヘンリー四世・五世時代の宗教闘争も16世紀末イングランドとの重要なパラレルのひとつである。16世紀末イングランド宗教闘争の時代に生きていたシェイクスピアは，宗教改革運動萌芽期にその劇の舞台を設定したのである。しかもシェイクスピアは，劇の中心人物のひとりとして，初期宗教改革運動と深く係わり，エリザベス朝においてしばしば論争の的になった人物を描いた。『ヘンリー四世』を執筆するシェイクスピアが「宗教」を強く意識していたのは確実である。

フランスでは1562年以来，カトリック教徒と新教徒(いわゆるユグノー)との争いが激化していた。1589年にカトリック側のアンリ三世が暗殺されるとユグノー派のアンリ四世(Henri Ⅳ)が即位した。イングランドは，アンリ四世に援軍を送っている。エセックス(Essex)伯は，カディス攻撃やアイルランド遠征で有名であるが，実は彼自身も1591年から翌92年にかけてカトリック同盟に対抗するアンリ四世支援軍を指揮している。ユグノー戦争は，アンリのカトリックへの再改宗を経て，ユグノー派に信仰の自由を認める1598年のナントの勅令に至り漸く一応の終結をみる。アンリ四世の英語綴りはHenry Ⅳである。つまりシェイクスピア劇のタイトルと一致する。もちろん原語の音は異なる。しかしHenri ⅣとHenry Ⅳの連想は容易である。ここにも，『ヘンリー四世』と宗教改革期の新旧キリスト教の確執とを結びつける契機があったと思う。

シェイクスピア劇のなかで宗教問題が重要な位置を占める作品は，『ヘンリー四世』ただひとつではない。シェイクスピアは，教皇とイングランド国王の対立を描く『ジョン王』(*King John*)をすでに書いていた。またシェイクスピア劇だけが，宗教問題を扱っているのではない。英国ルネサンス演劇は，その揺籃期から宗教改革と反宗教改革運動の闘争の嵐に巻き込まれていた。このことは，ハーベッジ(Harbage)の『英国演劇年譜』(*Annals of English Drama*)にざっと眼を通すだけで明らかである。16世紀中葉，あるいは新教的立場の，あるいはカトリック的立場の，多くの宗教プロパガンダ劇が書かれている。[17] シェイクスピアに比較的近いところでは，マーロウ(Marlowe)の作品がしばしば宗教に係わる。例えばローマ教皇を愚弄する『フォースタス博士』(*Doctor Faustus*)(1592-93)，あるいはエリザベス朝と同時代のフランス国内の宗教戦争を扱う『パリの虐殺』(*The Massacre at Paris*)(1593)。いずれも16世紀の宗教改革と血みどろの旧教－新教の闘争の時代にあって，実にきわどいテーマを展開している。あるいはマンディ(Munday)による合作とされる『サー・トマス・モア』(*Sir Thomas More*)(c.1593-c.1601)。この劇は，ヘンリー八世(Henry Ⅷ)の宗教改革の犠牲者モアを主人公にしている。あるいはまた，作者不詳の『ジャック・ストロー』(*Jack Straw*)。これに登場する反乱者の指導者のひとりジョン・ボール(John Ball)も，初期宗教改革者の側面をもつ。現存するテクストでは，ボールの宗教改革者としての側面はあまり描かれてはいないが，歴史上の彼は，オールドカスルと同じくウィクリフの信奉者のひとりであり，その教説を説いたため1376年に投獄された。リチャード二世時代の1381年に勃発した農民一揆で解放され，反乱の指導者として万民の平等を説いたが，反乱は鎮圧され彼自身は処刑された。このように，宗教改革関連の主題を扱った劇は，シェイクスピアの『ヘンリー四世』以外にいくつも書かれている。しかし『ヘンリー四世』が呼び起こした反響は，他の劇よりはるかに大きかった。その理由は，ひとつにはシェイクスピアの劇が他より人気を博していたからであり，ひとつにはオールドカスルが当時しばしば論争の的になっていた有名な歴史上の人

物であったからである。

オールドカスル/フォールスタフの描写と宗教改革の運動との関係を考える場合特に重要なのは，シェイクスピアの時代の清教徒との関係である。というのも，第一に(上述したように)オールドカスルが，清教徒をはじめとする敬虔な新教徒の尊敬する殉教者であったからであり，さらにフォールスタフの台詞がピューリタンの言葉使いの風刺的模倣の側面をもっているからである。

フォールスタフが清教徒の言動を風刺的に再現している点については，多くの批評家が指摘している。[18] フォールスタフは聖書から頻繁に引用するが，聖句的な言い回しの多用は，清教徒の特徴のひとつであったといわれる。ある研究者が調べたところによると，『第1部』の聖書からの全引用44のうち26箇所がフォールスタフの口から発せられているという。フォールスタフはもちろん，聖句をまじめにではなく，茶化しながら引用する。しかも彼が引用する聖書は，英国国教会によって認可された主教聖書ではなく非国教徒(nonconformist)の使うジュネーブ版聖書であるという。[19] フォールスタフの有名な「名誉の弁」(『第1部』，V. i. 134-41)の問答形式も，ピューリタン説教師に特徴的な口吻であったらしい。その他，フォールスタフの台詞には当時のピューリタンの通語が多く含まれている。例えば，神の選民を表す“saint”(『第1部』，I. ii.89)，永遠の断罪を受けた者を表す“wicked”(I. ii. 92)，あるいは神命を含意する“vocation”(I. ii. 101-102)など。またフォールスタフは，「機織り職人になりたいよ，そうなりゃ，賛美歌を歌ってくらせるのに」“I would I were a weaver; I could sing psalms”(『第1部』，II. iv. 130)というが，16世紀清教徒のステレオタイプの一大特徴は，賛美歌を歌うことであった。ピューリタンが賛美歌を歌うという点については，『冬物語』(*The Winter's Tale*)に「清教徒が角笛にあわせて賛美歌を歌う」“one Puritan . . . sings psalms to hornpipes”(IV. iii. 43-44)という道化の台詞がある。賛美歌といえば，ロラード派も清教徒と同じく，これを歌う習慣があった。

オールドカスル/フォールスタフに関する論議において清教徒問題を重視しなければならないもうひとつの理由は，1590年代に入って，エリザベス朝政府の清教徒に対する対応に明らかな変化がみられるからである。[20] エリザベス政権がカトリシズムを警戒し，これを抑え込もうとしたことはよく知られているが，他方では，新教国イングランドの内なる他者ともいうべき清教徒の活動をも弾圧しようとした。

カトリシズムをエリザベス朝体制が警戒し，これを抑え込もうとしたのは当然であった。対応を誤れば，スペインに代表される強力な反宗教改革勢力にイングランドは飲み込まれてしまうかもしれなかった。かくてイングランドは，対外的には，カトリック勢力に支援されるアイルランドをあるいは武力あるいは(新教徒イングランド人による)植民によって支配しようとし，さらにはオランダの反カトリック勢力やフランスのユグノーを援助し，[21] 国内にあっては，国教忌避者“recusant”をきびしく弾圧し，カトリックの戦闘集団たるイエズス会の活動の圧殺を試みたのである。このようなカトリシズムへの対抗という点ではエリザベス政権は，比較的結束しており対応も早く，80年代にはすでに大陸に新教徒支援軍を派遣し，国内においては多数のカトリック教徒を逮捕・刑死させていた。(もっとも，1598年にフランスがヴェルヴァン条約を締結しスペインとの和議を成立させてからは，バーリー[Burghley]卿セシル[Cecil]は，枢密院でフェリペとの講和を提案し，主戦論に立つエセックス伯とはげしく対立した。)

エリザベス政権の国内の過激新教徒に対する対応は，しかしながら，少なくとも1590年頃までは決して一枚岩ではなかった。政府内部には，反ピューリタニズムの旗手たるカンタベリー大主教ウィットギフト(Whitgift)に対して，清

教徒に共感的な，秘書長官ウォルシンガム(Walsingham)とレスター(Leicester)伯といった有力な枢密院議官がいた。おそらくこれらの有力者の存在が，清教徒に対する過酷な弾圧にブレーキをかけたのであろう。エリザベス朝政府の清教徒に対する対応は，後年に比べれば寛大であった。しかし，二人は1590年までに世を去る。二人の死を待っていたかのように，1590年代に入ると清教徒の弾圧が厳しさを増していった。

ウォルシンガムは強硬な新教の立場をとる人物であり，そのためメアリー(Mary)の治世には亡命生活を強いられた。彼は情報活動のオーガナイザーであり，内外にスパイ網を張り巡らしていたことで知られる。反カトリック的なマーロウが彼のエイジェントであったのは興味深い。レスターの宗教的態度もウォルシンガムと同様に強硬な新教寄りであった。彼は，英国国教会の改革の必要を唱えたが，大陸に亡命していたピューリタン指導者トマス・カートライト(Thomas Cartwright)が1585年に帰国した際これを保護した。さらにレスターは，ウォルシンガムとともに，スペインに叛旗を翻したネーデルランド(オランダ)の新教徒を積極的に支援したのみならず，彼自身1585年から1586年にかけてオランダ遠征軍の指揮をした。[22] この時の対スペインとの戦闘(1586年9月)で，彼の甥でありかつウォルシンガムの娘婿であったフィリップ・シドニー(Philp Sidney)は負傷し，その傷がもとで同年10月に死んだ。レスター，ウォルシンガム，そしてシドニーらは，カトリック同盟に対して新教国同盟の必要を強く訴えていた。[23]彼らの強硬な戦闘的プロテスタンティズムあるいはピューリタニズム寄りの姿勢は，レスター，ウォルシンガムの勢力が強い間は枢密院で決定される政策に影響を及ぼしただろう。強硬な新教徒あるいは清教徒の政治活動はおそらく，エリザベス朝政府中枢部にその共感者がいたことにより，より積極的なものになっただろう。彼らは，1570年代から1580年代にかけて，さまざまな弾圧を受けながらも，大胆な政治的発言・活動を行い，アングリカン体制に揺さぶりをかけてきた。例えばトマス・ウィルコックス(Thomas Wilcox)は，1572年，『議会への勧告』(*An Admonition to the Parliament*)を出版し議会にジュネーブ的な教会改革を求め，ジョン・スタッブズ(John Stubbs)は，1579年，エリザベスとカトリックのアランソン公との結婚に反対，ピーター・ターナー(Peter Turner)は，1584年，カルヴァン派長老制導入案を議会に提出，アントニー・コープ(Anthony Cope)は，1587年，ターナーと同様の法案の再提出を試み，ピーター・ウェントワース(Peter Wentworth)(彼はウォルシンガムの義兄弟)はコープとともに，同87年，議会における宗教改革論議禁止に抗議した。彼らは，カトリックとプロテスタントの混血児のようなアングリカニズムの体制に不満を抱いており，徹底的な宗教改革を実現しようとしたのである。

清教徒的宗教改革運動に共感的なレスターやウォルシンガムが1590年までに他界したことは，清教徒にとって不運であった。ここに至り漸くエリザベス政権は，ウィットギフトをピューリタニズム排撃の急先鋒として，清教徒活動家に容赦ない弾圧を加え始めた。[24] 1590年秋，カートライトその他の清教徒が逮捕され，フリート監獄に投獄された。翌1591年に彼らは，主教を誹謗し長老制組織に係わったとして告発された。1593年には反ピューリタン勅令が公布され，これによって長老会をつくるというピューリタンのクラシス(Classis)運動はつぶされた。同年4月には，過激清教徒のヘンリー・バロー(Henry Barrow)とジョン・グリーンウッド(John Greenwood)が反逆罪で処刑され，5月にはジョン・ペンリー(John Penry)が，英国国教会の主教制度を攻撃するマーティン・マープレリット(Martin Marprelate)文書の出版に係わったとして絞首刑に処せられている。

強権発動による清教徒弾圧と平行して，プロパガンダによるピューリタニズム抑圧の試みも当然なされた。1593年にはリチャード・バンクロフト(Richard Bancroft)が，『似非信仰規律通覧』(*A Surveye of the Pretended Holy Discipline*)と『危険な見解と行動』(*Dangerouse Positions and Proceedings*)を刊行し，清教徒の提唱する長老制を攻撃した。翌1594年にはリチャード・フッカー(Richard Hooker)が『教会政治理法論』(*Of the Laws of Ecclesiastical Polity*, Books Ⅰ-Ⅳ)を著し，イングランドの教会制度を伝統と理性の法に基礎をおくものだとして，清教徒の批判から擁護した。これ以後清教徒は，積極的な政治行動を抑え込まれていく。もちろんこの間一方では，カトリック活動家に対する苛烈な弾圧が続いている。

シェイクスピアが『ヘンリー四世』においてオールドカスル/フォールスタフというピューリタンと係わりの深い人物を舞台に登場させ，そして面白おかしく描いたのは，そういうピューリタン運動に対する弾圧が強まった時期とほぼ一致している。これは，どういう意味をもつか。シェイクスピアの真意がいかなるものであれ，少なくとも現象的には，作者はアングリカン体制によるピューリタン弾圧の尻馬に乗っているようにみえる。すなわちシェイクスピアは，殉教者オールドカスルという清教徒のイデオロギー支柱のひとつに揺さぶりをかけることによって，窮地に陥っている清教徒に追い打ちをかけているようにみえる。

シェイクスピアがオールドカスルの戯画的描写を通してピューリタニズムを揶揄しているとすれば，シェイクスピアは，カトリックあるいはカトリック寄りの劇作家だったのだろうか。というのも，清教徒は，カトリックの仇敵であったのだから。もちろんシェイクスピアは，国教会内部の穏健なプロテスタントであった可能性もある。しかしオールドカスルは，清教徒だけでなくイングランドの敬虔な新教徒に広く尊崇されていた。だとすれば，シェイクスピアは，穏健派プロテスタントというよりカトリックの可能性が大きいだろう。シェイクスピアがカトリックであった可能性については，そうだと主張する学者はいる。[25] しかし，シェイクスピアがカトリックだったという確証はない。

Ⅲ

シェイクスピアは，オールドカスルをフォールスタフに変更した。これも問題を孕んでいる。ここにも，作者のしたたかな底意が感じられてしかたがない。改名については，底意はなかったという見方が一般的である。例えば，古くは18世紀のジョン・アンティス(John Antis)。アンティスはガーター紋章官であったが，その著書『ガーター勲爵士団記録』(*The Register of the Garter*)(1724)のなかで，フォールスタフへの改名には何の悪意もなかったと思う，シェイクスピアは観客を楽しませる道化の名前を無作為に選んだのだろう，と述べている。[26] 今世紀の学者では，例えばハンフリーズ(Humphreys)がこう指摘している。「ガーター勲爵士叙爵の祝宴に上演するため『ウィンザーの陽気な女房たち』を大急ぎで書いていたシェイクスピアは，武勇の誉れとは正反対の人物の名前を変更する必要に迫られ，自分の芝居にすでに登場させていた臆病なガーター勲爵士に飛びついた。」[27] いずれも，改名に悪意を認めない「善意の」解釈である。

フォールスタフへの改名は，問題を孕んでいると述べた。しかしテイラー(Taylor)は，むしろ変更が歴史的問題性を消失させると考える。彼は，こう主張する。「フォールスタフという名前は劇の最も忘れがたい人物を虚構化し，脱政治化し，世俗化し，そしてその過程で平凡なものにしてしまう。劇の中心人物のひとりである彼については当時相対立する二つの解釈があって，それが劇に緊張を与えた。

フォールスタフという名前は，その緊張を劇から奪ってしまう。」[28] そうだろうか。後述するように，オールドカスルがフォールスタフに変更されたからといって，この人物の問題性は，決して消失しないと私は思う。

オールドカスルの代わり選ばれたフォールスタフを名とする人物は,『ヘンリー六世・第1部』(*1 Henry VI*)にすでに登場している。この人物は,普通ファストルフ(Fastolf)という名前で知られる歴史上の人物である。シェイクスピアは，綴りを変えてフォールスタフとして登場させている—少なくとも第1二折り本(F1)で判断するかぎりでは。(いくつかの現代版，例えば近年出版されたオクスフォード全集版では，FalstaffではなくFastolfと綴られている。)フォールスタフは，ファストルフの単なる異綴りという説もある。[29] しかしフォールスタフ異綴り説を唱える学者でさえ，16世紀の文献にこの綴りを発見することができず,「シェイクスピアがなぜフォールスタフという,非常に珍しい綴りを思いついたのかは難しい問題だ」[30] と認めている。私は，シェイクスピアが意図的に綴りを変えたのだと思う—その理由を突き止めるのは難しいが，オールドカスルの場合と同様に,ファストルフのネガティヴな描写が招くかもしれない批判をかわすために，綴りを変更することによって劇中人物の虚構性を強調したかった可能性はある。[31]

シェイクスピアが『ヘンリー六世・第1部』で描いたフォールスタフは，臆病風に吹かれて退却し，英軍に大損害を与え，トールボット(Talbot)によってガーター勲爵士のしるしを脚から引きちぎられる。歴史上のファストルフは傑出した軍指揮官であり，シェイクスピアのキャラクターとはかなり異なる。パーテー(Patay)での敗北の結果歴史上のファストルフも，(トールボットではなくベッドフォード[Bedford]公爵によって)勲爵士のしるしをはぎ取られるが，後にこの件について調査が行われ,ファストルフの名誉は回復される。ファストルフの死後の評価については，15世紀の『悪人列伝』(*Chronique de Monstrelet*)の記述を踏襲するチューダー朝の年代記では臆病者ということになっており，シェイクスピアもこれを継承している。しかしファストルフのエリザベス朝における評価には，曖昧なところがある。一説によれば，シェイクスピアはファストルフを否定的に描いているが,ファストルフは新教徒の間では高く評価されており，彼をロダード派の共感者とみていた清教徒は，ファストルフがトールボットを見捨てて逃亡したというストーリーを歴史上の誤謬として退けているという。[32] また『英国人名辞典』(*D.N.B.*)によれば,歴史上のファストルフには3つの遺言状があるが，第一の遺言状の序文がロラード派に好まれたテクスト,「コリント人への第1の書簡」14章に言及していることから，一部の伝記執筆者は，ファストルフをロラード派支持者と考えているという。[33] さらに，シェイクスピアと同時代の詩人・劇作家のドレイトンがファストルフを賛美する詩を書いている点に注目してもよいだろう。これは，ファストルフが新教徒の間で尊崇されていたことの証拠のひとつである。というのも，ドレイトンは，シェイクスピア劇によって傷つけられたオールドカスルの名誉を回復すべく執筆・上演されたオールドカスル『サー・ジョン・オールドカスル』(*Sir John Oldcastle*)の共同執筆者のひとりであったからである。

もしファストルフが清教徒に崇敬されていたとすれば，シェイクスピアは『ヘンリー六世・第1部』において，フォールスタフを(名前は，歴史上の人物名を少し変えているけれども)臆病な裏切り者として否定的に描出することによって，ピューリタニズムを実に巧妙にこけにしている可能性がある。さらに，もし『ヘンリー六世』のファストルフ/フォールスタフの描き方が清教徒をこけにしているとすれば，シェイクスピアは『ヘンリー四世』

において，もうひとりの(もっと有名な)新教殉教者の名前をその臆病者の名前に変更することによって清教徒を二重にからかっているといえるかもしれない。もちろんこのことに確証はない。しかし，シェイクスピアの意図がいかなるものであれ，『ヘンリー四世』のオールドカスル/フォールスタフの描き方に対する清教徒の激しい反発は，シェイクスピアのオールドカスル/フォールスタフ戯画像が彼らにとって許し難い冒瀆であったことを証言している。

IV

『ヘンリー四世』には，オールドカスル→フォールスタフ以外にも，オリジナルの登場人物名の変更がある。ハーヴェイ(Harvey)→バードルフ(Bardolph)，ラッセル(Russell)→ピート(Peto)の変更がそうである。これについてもテクストにその痕跡があり，まず間違いないと思われる。[34] 名前が変更されたのは，オールドカスル→フォールスタフの場合と同じく，有力者筋からの反発を避けるためではなかったか，と指摘されている。というのも，ハーヴェイがサウサンプトン(Southampton)伯の母親の3番目の夫の名前であり，またラッセルがベッドフォード(Bedford)伯爵家の姓であったから。その可能性は十分にあると思う。が，私がここで考えてみたいのは，シェイクスピアが当初，フォールスタフの追い剝ぎ仲間たちに，材源の『ヘンリー五世の名高い勝利』には見あたらないハーヴェイとラッセルという名前をつけたことの意味である。

『ヘンリー四世』を執筆していたシェイクスピアにとってハーヴェイといえば，まずナッシュ(Nashe)－ハーヴェイ論争に登場するゲイブリエル・ハーヴェイ(Gabriel Harvey)のことではなかっただろうか。ナッシュ－ハーヴェイ論争は，あるいは文学論であり，あるいは個人的中傷合戦であったが，この論争には，マーティン・マープレリット論争も一枚絡んでいる。ハーヴェイは，マープレリット論争に関連して，主教側の論客たち(ジョン・リリー［John Lyly］，トマス・ナッシュ［Thomas Nashe］，ロバート・グリーン［Robert Greene］)を「何もかもめちゃくちゃにしてしまう輩」と批判した。[35] これが一因となって，ナッシュ－ハーヴェイ論争は激しさを増していくのであったが，ナッシュがハーヴェイを敵視したのは，ハーヴェイがピューリンであったからだともいわれている。[36] ナッシュが攻撃したのは，ハーヴェイだけではない。彼は，当代の悪弊を批判する『悪弊の解剖』(*The Anatomy of Abuses*)を著した清教徒フィリップ・スタッブズ(Philip Stubbes)も攻撃している。

主教側の論客ナッシュとペンによる激戦を繰り広げたハーヴェイをシェイクスピアがどのようにみなしたかは判然としないが，『ヘンリー五世』においてハーヴェイ/バードルフが教会で盗みを働き，処刑されるのは暗示的である。それは，オールドカスル/フォールスタフが結局は追放されるのとどこか似通っている。シェイクスピアは，清教徒と目される，あるいはどこかで清教徒とつながりのある人物については，いささか冷たい仕打ちをしているようにみえないだろうか。ここにも当時の宗教上の確執が見え隠れするように思う。

フォールスタフの追い剝ぎ仲間ピートの名前をラッセル(Qq，F1: Part 1，I．ii．162，"Rossil")に変更した理由は，ラッセルの姓をもつベッドフォード伯爵家を怒らせないためであったかもしれないが，シェイクスピアがこの人物を最初にラッセルと名づけた理由の推測は，ハーヴェイ/バードルフの場合ほど容易ではない。シェイクスピアのラッセルと関係がありそうなベッドフォード伯爵家の人物は，1594年5月から1597年3月まで—つまり『ヘンリー四世・第1部』執筆推定時期—アイルランド総督であったウイリアム・ラッセル

(William Russell)であるかもしれない。

あるいはシェイクスピアは，エリザベス・ラッセル(Elizabeth Russell)を念頭に置いていたのかもしれない。というのも，レイディ・ラッセルは，シェイクスピアの所属する劇団の敵であったからである。1596年，宮内大臣一座のジェイムズ・バーベッジ(James Burbage)は，旧ブラックフライアーズ修道院の建物を改造して新劇場をつくろうとした。一座の常設劇場シアター座(1597年4月13日に借地期限切れ)の代替劇場を建設しようとしたのである。しかしながら，96年11月，ブラックフライアーズ地区に居住する貴族たちが枢密院に劇場建設中止の請願を行った。[37] レイディ・ラッセルは，そのときの劇場建設計画阻止運動の指導者のひとりであった。だとすれば，シェイクスピアは，臆病な追い剝ぎ仲間のひとりをラッセルと名づけることによって，劇団の敵レイディ・ラッセルにささやかな意趣返しを試みたということになるのかもしれない。

レイディ・ラッセルは，ベイコン(Bacon)兄弟の叔母，彼らの母親の妹である。彼女は，ベイコン兄弟のうち特にアントニー・ベイコン(Anthony Bacon)を宗教上の理由で，またよからぬ交際のため，しばしば難詰したといわれる。アントニーは，フランスやスペインにコネをもっており，その友人の多くがカトリックであり，なかには同性愛者も含まれていたという。(アントニー・ベイコンは，エセックス伯の忠実な僕であった。バーリー卿がエセックス伯とベイコン兄弟を離反させようとしてアントニーに秋波を送ったときも，全くなびかなかった。ちなみにセシルがアントニー懐柔の伝言を依頼したのは，レイディ・ラッセルであった。アントニーは，伯爵が1601年に反乱事件を起こしたときも，幸運なことに，罪を問われることはなかった。)

かりにシェイクスピアがレイディ・ラッセルを，あるいはウイリアム・ラッセルを，同名の喜劇的人物を芝居に登場させることによって揶揄しようとしたのだとしても，それが宗教的な確執の反映だと証明することはできない。本稿の視点からすれば，レイディ・ラッセルあるいはウイリアム・ラッセルが清教徒であるか，あるいは二人がカトリックの敵であり，[38] 一方シェイクスピアがカトリック教徒であったということになれば一番都合がよいわけだが，残念ながらそんなにうまく話は進まない。上に述べたように，シェイクスピアがカトリック教徒であったかどうかについては，その可能性は十分にあるけれども，確証はないのである。

シェイクスピアがカトリック教徒であったかどうかは措くとしても，彼が他の多くの劇作家と同じく反ピューリタン的であったのは間違いないだろう。そのことは，『十二夜』(*Twelfth Night*)のマルヴォーリオ(Malvolio)や本稿で扱ったフォールスタフの描き方に示唆されているし，あるいは『終わりよければすべてよし』(*All's Well that Ends Well*)の次の道化の台詞にも明らかではないだろうか。ルーシヨーン(Roussillon)伯爵夫人にヘレナ(Helena)を呼んでくるように命じられた道化は，ふざけて次のようにいう。

> 「[自分の]正直はピューリタンのようではないが，さしつかえはないだろう。傲慢な心という黒のガウンの上に謙遜という白の法衣を着るのだから。」
> "Though honesty be no puritan, yet it will do no hurt; it will wear the surplice of humility over the black gown of a big heart." (I. iii. 93-94)

この台詞には，ジュネーブ・カルヴァン派聖職者の着る黒の僧服の上にサープリス(聖職者の白衣)を纏いアングリカニズムにコンフォーム(服従)していることを装う，清教徒聖職者のイメージがある。これはピューリタンの欺瞞に対する批判ではないか。

V

シェイクスピアの『ヘンリー四世』がピューリタン批判の演劇である状況証拠は，上に論じたように，いくつもある。しかしそれを実証することは，難しい。ことによるとシェイクスピアの「底意」は，毀誉褒貶が同居するオールドカスルの宗教的・政治的問題性を種に刺激的な芝居をつくるという程度のことだったかもしれない。しかし，オールドカスル/フォールスタフの描き方が初期宗教改革殉教者をこけにしていると清教徒たちに受けとめられたのは，歴史的事実である。清教徒たちにしてみれば，『ヘンリー四世』は，彼らの尊崇するプロテスタント殉教者を冒瀆することによって，彼らのイデオロギー支柱に揺さぶりをかけるプロパガンダにほかならなかった。加えて，オールドカスル/フォールスタフの措辞は，彼ら自身の言語習慣を戯画的に模倣さえしているようにみえる。清教徒たちが反発したのは，当然であった。

もし『ヘンリー四世』が反ピューリタン的であったとすれば，シェイクスピアの意図がいかなるものであれ，劇は，清教徒の活動を封殺しようとしていたアングリカン体制にとって好都合のプロパガンダとして機能しただろう。『ヘンリー四世』が利したのは，アングリカン体制だけではない。それは，清教徒その他のプロテスタントと対立するカトリックをも利した。イエズス会士ロバート・パーソンズ(Robert Parsons)は，『イングランドの三つの回心に関する叙述』(*A Treatise of Three Conversions of England*)(1604)において，オールドカスルを新教徒の立場から擁護するジョン・フォックスの『殉教者列伝』をはげしく攻撃している。パーソンズは，オールドカスルについて「すべての英国人が知っているように，また劇作家が舞台に描きだしているように，悪党の騎士であり，ヘンリー五世の治世に窃盗と反乱の罪で死刑に処せられた」[39]と記している。ここで言及されている芝居は，シェイクスピアの『ヘンリー四世』である。パーソンズは，シェイクスピア劇を利用してプロテスタントを攻撃したのである。

このようなカトリック側からのプロテスタント攻撃を，新教側はもちろん，座視していたのではない。1611年，プロテスタントの歴史家ジョン・スピード(John Speed)は，『大英帝国の劇場』(*The Theatre of the Empire of Great Britaine*)を著し，次のようにパーソンズに反論した。「『三つの回心』の著者は，オールドカスルを悪党，盗人，反逆者に仕立てているが，その典拠は役者である。つまり，この教皇派の男とその詩人だけがその拠り所なのである。そのようなやり方は，信用ある賢人にではなく中傷のペンに似つかわしい。虚言について教皇派の彼と詩人の道義心は，同じようにひどいものだ。一方はいつも話をでっちあげ，他はいつも真実をねじ曲げる。」[40]やや時代は降るが，トマス・フラー(Thomas Fuller)は，『イングランド名士伝』(*The Worthies of England*)(1662)のなかで，こう書いている。「サー・ジョン・オールドカスルは，まず舞台上で攻撃の矢面に立たされた。すなわち，あらゆる芝居で臆病者として笑いものにされたのである。どんな財布からこのどす黒い金が出てきたのかは，はっきりしている。教皇派の輩がオールドカスルを異端者として誹謗したのであるが，それゆえ彼はまた臆病者でなければならなかった。しかるに実際は，彼は徹頭徹尾武人であり，その時代の誰にも劣らず勇敢であった。」[41]敬虔なプロテスタントにしてみれば，殉教者オールドカスルを冒瀆的に表象する劇作家は，唾棄すべき教皇派にほかならなかったのである。

注

＊ 本稿は，第35回シェイクスピア学会・セミナー「歴史劇再読—*Henry IV* の場合」(勝山貴之司会，1996年10月20日，立命館大学)のために執筆された拙稿に加筆を施したものである。

1 執筆・初演推定時期については，Alfred Harbage，*Annals of English Drama, 975-1700*, rev. by S. Schoenbaum (London: Methuen，1964)，64参照。

2 例えば，四折り本(1600)『第2部』(I. ii. 120)に"Old."の話者名が残っている。改名に係わるテクストの痕跡については，A. R. Humphreys，Introduction，*The First Part of King Henry IV*, Arden Shakespeare (London: Methuen，1960)，xv-xvi 参照。シェイクスピア劇からの引用および幕・場・行数表記は，G. Blakemore Evans, ed.，*The Riverside Shakespeare* (Boston: Houghton Mifflin Company，1974)による。

3 改名の経緯については，Humphreys，Introduction，*First Part of King Henry IV*, xiii-xv 参照。

4 サー・ロバート・コットン(Sir Robert Cotton)の司書であった故事研究家のリチャード・ジェイムズ(Richard James)は，1625年頃にサー・ヘンリー・バウチャー(Sir Henry Bourchier)に宛てた書簡のなかで，こう述べている。シェイクスピアがヘンリー五世を初めて登場させた芝居でヘンリーと一緒に道化役を演じたのは，フォールスタフではなくオールドカスルであった。これがオールドカスルの子孫の反感を買ったために，作者は人物名をフォールスタフに変更し，その結果オールドカスルに劣らぬ有徳のサー・ジョン・ファストルフ(Fastolphe)を中傷することになった，と。Alice-Lyle Scoufos，*Shakespeare's Typological Satire* (Athens: Ohio UP，1979)，42参照。

5 ロダード派の人びとを自分たちの先駆者とみていた清教徒たちにとって，オールドカスルは，彼らのいわば英雄であった。Irving Ribner，*The English History Play in the Age of Shakespeare* (1957; New York，Octagon Books，1979)，203参照。

6 *Ibid.*，204.

7 『オールドカスル・第1部』および『殉教者の鑑』については，Peter Corbin and Douglas Sedge，eds.，*The Oldcastle Controversy: Sir John Oldcastle, Part 1 and The Famous Victories of Henry V* (Manchester: Manchester UP，1991)参照。

8 年代記執筆者たちは，オールドカスルの武勇について次のように書いている。ジョン・フォックス(John Foxe):「勇敢な騎士」，ジョン・ストー(John Stow):「すぐれた軍人」，エドワード・ホール(Edward Hall):「勇敢な隊長，大胆なジェントルマン」，ジョン・ベール(John Bale):「この上なき勇敢な武人」，ラファエル・ホリンシェッド(Raphael Holinshed):「勇敢な隊長」。以上の歴史家の記述については，Gary Taylor，"The Fortunes of Oldcastle，" *Shakespeare Survey* 38 (1985)，93参照。

9 ロラード主義者オールドカスルの処刑に至る経緯については，Corbin and Sedge，eds.，*Oldcastle Controversy* の序論(2-6)を参照。

10 英国ルネサンス期のオールドカスル評価については，Scoufos，*Shakespeare's Typological Satire*, 21-69に詳述されている。S. シェーンボーム，『シェイクスピアの生涯』，(小津次郎他訳，紀伊國屋書店，1982)，229-34には，16-17世紀のオールドカスル/フォールスタフ論争についての簡

潔な記述がある。

11 オールドカスルが相対立する評価を受けていたことをシェイクスピアは，もちろん知っていただろう。彼は，オールドカスルと同時代の年代記執筆者の著作は読まなかったかもしれない。しかし，フォックスやストーの著作を通して，あるいはホールやホリンシェッドの著作を通して，あるいは同時代人の口を通して，オールドカスルに関する情報を入手することができた。

12 Geoffrey Bullough, *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, vol.8 (London: Routledge and Kegan Paul, 1962), 171.

13 シェーンボーム，『シェイクスピアの生涯』，231，Robert J. Fehrenbach, "When Lord Cobham and Edmund Tilney 'were att odds': Oldcastle, Falstaff, and the Date of *1 Henry IV*," *Shakespeare Studies* 18 (1986): 92参照。

14 意図的風刺の可能性を主張する論考については，例えば E. A. J. Honigmann, "Sir John Oldcastle: Shakespeare's martyr," *"Fanned and Winnowed Opinions": Shakespearean Essays presented to Harold Jenkins*, John W. Mahon and Thomas A. Pendleton, eds. (London: Methuen, 1987), 118-32参照。

15 西村貞二，『ルネサンスと宗教改革』(講談社学術文庫，1993)，165-66。

16 劇の時事的言及に関する最近の論考については，例えばCharles Whitney, "Festivity and Topicality in the Coventry Scene of *1 Henry IV*." *English Literary Renaissance* 24 (1994): 410-48参照。Whitneyは、バフチン(Bakhtin)を援用し，『ヘンリー四世・第1部』4幕2場「コヴェントリーの場」の時事性と祝祭的エネルギーとを分析している。

17 Harbage, *Annals of English Drama*, 22-39参照。

18 以下ピューリタンのバーレスク的表象としてのフォールスタフについては，Kristen Poole, "Saints Alive! Falstaff, Martin Marprelate, and the Staging of Puritanism," *Shakespeare Quarterly* 46 (1995): 64-67参照。

19 アーデン版編者は，フォールスタフの台詞「今夜は飲み明かし，お祈りは明日だ」"Watch to-night, pray to-morrow"(II. iv. 277)が，「マタイによる福音書」26章41節の「誘惑に陥らぬよう，目をさまして祈っていなさい」"Watche, and praye that ye enter not into temptation" のもじりである可能性を指摘し，さらに，ジュネーブ版聖書「ルカ伝」22章のページ標題が"Watch & Pray"である点に注意を喚起している。Humphreys, ed., *First Part of King Henry IV*, 71n.参照。

20 以下の宗教的・政治的歴史記述に際して利用した主要文献は，次の通りである。G. B. Harrison, *The Elizabethan Journals, 1591-1603* (London: Routledge, 1938); G. B. Harrison, *The Life and Death of Robert Devereux Earl of Essex* (London: Cassel, 1937); J. E. Neale, *Queen Elizabeth I* (1952; Chicago: Academy Chicago Publishers, 1992); Rosemary O'Day, *The Longman Companion to the Tudor Age* (London: Longman, 1995); Alan and Veronica Palmer, *The Chronology of British History* (London: Century, 1992); Lytton Strachey, *Elizabeth and Essex* (Harmondsworth: Penguin Books, 1950); Neville Williams, *The Chronology of the Expanding World, 1492-1762*, 2nd ed.(New York: Simon & Schuster, 1994); 大木英夫，『ピューリタン』(中公新書，1968年); 大野真弓編，『イギリス史』(新版)(山川出版社，1978)。

21 外国のカトリック勢力との戦いにはもちろん，イングランド内の政治的・社会的秩序維持の

ための，ナショナリズムの昂揚という目的もあっただろう。

22 この時の戦闘には，ピューリタンからその同情者とみられていたエセックス伯も参加していた。

23 セシルもピューリタンには同情的であったが，彼の姿勢は戦闘的ではなく，おおむね慎重な対外政策を提唱した。

24 ウィットギフトは，その「カンタベリー大主教箇条」"Lambeth Articles"が示しているように，神学的にはカルヴィニストであるが，英国の伝統に基礎をおき，国王の権威に服する英国国教会の主教制度を容認，これを強く支えたのである。この点が，同じくカルヴァンの流れを汲みながら，社会全体を聖書に従って徹底的に改造しようとした清教徒の立場と決定的に異なる。彼はエリザベスの時代，聖職者としてはただひとりの枢密院議官であった。この点にも，エリザベスがウィットギフトを強くサポートしていたことが窺える。エリザベスは，ピューリタニズムがアングリカン体制にとって大きな転覆性を有することを認識していた。つまりピューリタンは，国王を廃しプレスビテリ(長老会)をもとうとする一派と見ていた。(大木英夫，『ピューリタン』，66参照。)「カンタベリー大主教箇条」については，Gerald M. Pinciss and Roger Lockyer, eds., *Shakespeare's World: Background Readings in the English Renaissance* (New York: Continuum Publishing Company, 1989), 47-48参照。

25 最近ではTaylorがこの立場をとっている。Gary Taylor, "Forms of Opposition: Shakespeare and Middleton,"*English Literary Renaissance* 24 (1994): 290-98.

26 Quoted in Scoufos, *Shakespeare's Typological Satire*, 27, 28.

27 Humphreys, Introduction, *First Part of King Henry IV*, xiii.

28 Taylor, "The Fortunes of Oldcastle," 95.

29 Norman Davis, "Falstaff's Name," *Shakespeare Quarterly* 28 (1977): 513-15.

30 *Ibid.*, 513.

31 George Walton William, "Second Thoughts on Falstaff's Name," *Shakespeare Quarterly* 30 (1979), 83も同様の見解を語っている。

32 H. Mutschmann and K. Wentersdorf, *Shakespeare and Catholicism* (New York: Sheed and Ward, 1952), 348.

33 Bulloughは，ホールとホリンシェッドがファストルフをロラード派とみなしていたと指摘している。Bullough, *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, vol. 8, 171.

34 バードルフ，ピートへの改名については，Humphreys, Introduction, *First Part of King Henry IV*, xvi参照。

35 Evelyn B. Tribble, *Margins and Marginality: The Printed Page in Early Modern England* (Charlottesville: UP of Virginia, 1993), 126.

36 Alan and Veronica Palmer, *Who's Who in Shakespeare's England* (New York: St. Martin's Press, 1981), 107.

37 E. K. Chambers, *The Elizabethan Stage*, vol. 4 (Oxford: Clarendon Press, 1951), 319-20.

38 ウィリアム・ラッセルは，アイルランドでカトリック教徒を弾圧しているという意味では反カトリックだったといえるかもしれない。

39 E. K. Chambers, *William Shakespeare*, vol. 2 (Oxford: Clarendon Press, 1930), 213.

40 Quoted in Scoufos, *Shakespeare's Typological Satire*, 40.

41 Quoted in Humphreys, Introduction, *First Part of King Henry IV*, xvii.

Oldcastle/Falstaff as a "Misrepresentation" of a Proto-protestant Martyr

Kazuaki Ota

This paper attempts to demonstrate how deeply Shakespeare's *Henry IV* plays (first performed during 1596-98) were involved in the religio-political struggle of the final decade of the sixteenth-century in England.

The consensus is that Shakespeare's famous fat knight, Sir John Falstaff, was originally named "Oldcastle." Shakespeare later altered the original name to "Falstaff" because his "misrepresentation" of Oldcastle offended the Puritans and other pious Protestants who revered Oldcastle as an early English Protestant martyr. To them, Shakespeare's burlesque representation of him as a "pampered glutton" and "aged counsellor to youthful sins" was nothing but a slander against this highly esteemed Protestant martyr. Hence, a number of Puritan writings attempted to restore Oldcastle's good name, which the Puritans thought the *Henry IV* plays had sullied, soon after their first performance.

As scholars have pointed out, Oldcastle/Falstaff has many traits that would have reminded the Elizabethan audience of the Puritan stereotype. Oldcastle/Falstaff cites mockingly from the non-conformist Geneva Bible rather than the Bishops' Bible. His lengthy speeches echo the Scriptural style of the sanctimonious Puritan. His use of such phrases as "corrupt a saint," "'tis my vocation," "Watch tonight, pray tomorrow," and "light within" smacks of the sixteenth-century Puritans. He also alludes to the psalm-singing of the Puritans when he wishes he were a weaver so that he could "sing psalms." Thus, it is quite likely that Shakespeare intended Sir John to be a satirist ridiculing Elizabethan Puritans as well as a "misrepresentation" of a proto-protestant martyr.

In the 1590s, the government of Elizabeth I was suppressing Puritan activity more vigorously than ever and, at the same time, producing active anti-Puritan propaganda. In such a historical context, Shakespeare's Oldcastle/Falstaff plays would have functioned as another piece of anti-Puritan propaganda, serving the interests of an Elizabethan government determined to crush extreme Puritan activity. The plays also served the interests of the militant Catholics, as illustrated by the fact that the Jesuit Robert Parsons availed himself of Shakespeare's Oldcastle/Falstaff plays when he "railed" against Oldcastle by labelling him as a "ruffian-knight brought by comedians on the stages."